一 西 だ よ り

豊川市立一宮西部小学校通信
令和 8年 1月30日 第29号
発行;校長 村上謙一

【アクティブタイムの様子】

2学期からこれまでの児童会活動をプロジェクト型に変更して、アクティブタイムの時間としています。具体的には月1回の委員会活動であったものを、自分たちでやりたいことを決めて(みんなのためになることが条件です)、人を集めてやり遂げるというものです。例年通りの決まった活動を行っていたこれまでを改めて、起業(プロジェクト)に挑戦中とも言えます。1月19日(月)は第3回のプロジェクト会議が行われました。この時間に清掃活動をするプロジェクト(体育倉庫の掃除やトイレの掃除、コイ池掃除など)もあれば、そこでは企画立案や準備をして別日にイベントを開く(ダンスや演劇、球技、工作、放送など)というプロジェクトもあります。先生方はその活動に伴走して見守るという立場です。子どもたちが困ったら、相談に乗りますが解決していくのは自分たちです。うまくいかなければそれを学びとして、再度プロジェクトするだけです。

この活動は児童会活動で議会制民主主義を学ぶ5・6年生が行いますが、触発された4年生が独自に SDGsのプロジェクトを立ち上げて活動しています。やりたいことがあって、やりたいことができて、仲間が広がって、先輩の姿を見て後輩が学んでいく学校って、なんだか楽しいですよね。

1月21日(水)、体育館で2回目のダンスプロジェクトが開催されました。このプロジェクトも大もりあがりでした。

【学校評価アンケートの自由記述から】

昨年12月実施の学校評価アンケート「自由記述」に寄せられたご心配についてお答え第2弾。

★「教師が責任もって見てくれているのか疑問」「先生の責任感が欠けているように感じる」

家庭数 423 の内、上記2件の「責任」に関するご心配の声をいただきました。東愛知新聞が 1/7 の記事で取り上げた通り、チーム担任制は東三河地方では本校が初めての取組となります。様々なご心配が生まれるのは当然のことと考えています。しかし、半年の取組で9割近くの児童がこの取組を肯定的にとらえていることもゆるぎない事実です。

まず、教師の責任感が低下しているように感じさせてしまっていることについて、お詫び申し上げます。その上で、今回は私が考える「責任」についてお話させていただきます。

担任は学級のだれも困らないよう、個別最適な支援をする責務があります。その上で、チーム担任制では児童を学級の客体から、主体に改めようとしています。学級を児童の手に返そうとしているとも言えます。これを本校では「当事者意識」と表現しています。そうすると、学級の問題は担任のものではなく、当事者である自分たちが解決するべき課題になってきます。課題を解決する過程そのものが学びになります。先生が「ごめんなさい」「いいよ」をさせて、先生が解決していくこれまでの生徒指導の手法では、新たな事態を自分で解決しようとする気力も、知恵も育ちません。また、気に入らない結果には文句を言うようになります。選挙の投票率は低いが政治に文句は言う私たち大人の社会に似ていませんか。日常的に課題の当事者として向き合って、よりよい解決を図る経験を重ねていく。この積み重ねが10年後、20年後の社会で成熟した民主主義社会の形成者を育てることにつながるのではないでしょうか。

「責任」をこのような視点で見つめなおしていただけると、チーム担任の取組が目指そうとしているところをご理解いただけると考えます。また、1人の担任が1つの学級を1年間受け持つという責任のもち方は、一つの個性による多様性への対応の限界にきています。そこで担任の責任を、担任一人の個性による見取りから、複数人による多重多層の見取りへと変換しています。教室の多様性の実態は本紙28号(前号)でお伝えの通りです。